慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇世紀初頭のインドにおける日本語教育：佐野甚之助の文献から
Sub Title	Japanese language education in the beginning of 20th century India : from the writings of Sano Jinnosuke
Author	Panda, Nabin Kumar
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2017
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.34, (2017.) ,p.221- 241
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20170000-0221

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇世紀初頭のインドにおける日本語教育

――佐野甚之助の文献から――

ナビン　クマール　パンダ

はじめに

二〇世紀の初頭にインドでも日本語が教授されたことが、多くの先行研究[1]でしばしば指摘されている。例えば、Hayが「一九〇五年にラビンドロナート（タゴール）が日本に柔道及び日本語の教師を求めたところ、佐野甚之助がその依頼に応じ、インドに長期間滞在した」（筆者訳）[2]と記しているように、インドで日本語教育を導入したのはタゴールで、その教壇に立ったのは佐野甚之助という人物である。

タゴール研究で有名な我妻和男がさらに歩をすすめ、「一九〇五年には、河口慧海とタゴールの間の話で、福沢諭吉の推薦によって柔道及び日本語を教えに佐野甚之助が」[3]インドに渡ったと述べ、タゴールと佐野甚之

助の間のつながりを示唆している。

ただし、これらの記載は単なる表面的な言及だけであり、日本語教育研究で頻繁に出されている基礎的な問題提起、即ち、㈠この時期に、インドで日本語教育が何の目的で導入され、どこで教えられたか、㈡佐野甚之助が、なぜ、どのような経路でタゴールに紹介され、インドへ来たのか、㈢日本語教育がどのような過程で実行されたか、という問題はインドの日本語教育分野では十分に検討されていない。おそらく、今まで、これらの問題に答えられるような適切な資料を入手できていなかったことがその主な原因であろう。

そこで、筆者は、日本留学中、Hayや我妻の上記の記載を糸口にし、佐野甚之助自身がこれに関して何か覚え書きを残していないかと考え、偶然、以下の二冊の古い文献を発見した。いずれのものも、佐野甚之助によって書かれているものである。

1) 佐野甚之助［大正四年（一九一五）］：『タゴール先生と自分』「名士のタゴール観」、成南社出版、東京、二六六―二八〇頁

2) 佐野甚之助［大正六年（一九一七）］：「印度及印度人」、丁未出版社、東京

小論は、これらの資料に基づき、上記の問題を追求し、二〇世紀初めのインドにおける日本語教育状況を把握しようとする試みである。本研究によって、この時期におけるインドでの日本語教育の起点やその経過を明らかにしたい。さらには、インドでの日本語教育の基盤を築いた功労者でありながら、時代を経て忘れられてしまった佐野甚之助の再評価を企図している。

本研究は、次の二つの節により展開される。第一節に当時のインドの日本語教育に関わっていた人物、及び、日本語教育が行われた機関を紹介し、インドで日本語教育が導入された理由を論じる。第二節でインドで

日本語教育が実施された理由や過程を、佐野に依拠して説明する。最後に、これらの成果をもとに、筆者の考察を述べることにする。

一　インド日本語教育に関わっていた人物と機関

一―一　ロビンドロナート・タゴール（一八六一～一九四一）

ロビンドロナート・タゴール（以下、タゴールと記す）はインドで初めて日本語教育を導入した人物である。タゴールは、また、一九一三年にアジアで初めてノーベル文学賞を得た著名な人でもある。彼が、ノーベル賞を受賞するかなり前から、有名な詩人として、日本の学者を始め、世界のさまざまな学者と知り合っていた。日本の学者の中で、最も親しくなったのは、「The Book of Tea（茶の本）」などで知られる岡倉天心（一八六三～一九一三）である。タゴールは岡倉の思想に非常に影響されていただけではなく、彼を通して多くの日本の学者にも紹介されていた。これらの学者たちは、「タゴールの意志や精神」[4]のもとで、インドでの日本文化や日本語教育の導入及び拡大に大きな役割を果たした。佐野甚之助もそうした学者の一人である。

一―二　佐野甚之助（一八八二～一九三八）

前述のように、インドではタゴールが日本語教育を導入したが、それをインドの現場で教授し、日本語教育を実行したのは佐野甚之助（以下は、佐野）である。一九〇五年以前に、インドで日本語が教授された情報は

まだないため、佐野はインドでの最初の正式な日本語教師であると言える。

まず、この佐野はどのような人物であったか見てみる。

佐野についてひとつにまとめられた情報は存在しないが、様々な資料から情報を集約することはできる。その一つの重要な資料は佐野が卒業した慶應義塾の図書館に現在も大切に保管されている「入社帳」である。「入社帳」に出ている佐野の部分をそのまま表1に掲載したが、これによると、佐野は北海道出身で、甚左衛門の長男として明治一五年（一八八二）三月に生まれ、一四歳の時、東京にきて、明治二九年（一八九六）に慶應義塾に入学したということがわかる。

表1：「慶應義塾入社帳」に記載された佐野の情報

本人姓名：佐野甚之助
本籍身分：渡島国爾志郡熊石村大字態席平民甚左衛門長男
生年月：明治十五年三月生
入社年月：明治二十九年一月入社
証人姓名：井出徳太郎

（『慶應義塾入社帳』、第四巻、四五〇頁）

この「入社帳」の情報に加えて、佐野の慶應義塾での学歴について、さらに詳しい情報が慶應義塾に関係の深い新聞『時事新報』[5]の記事に見える。この記事は、佐野の一九〇五年のインド訪問を際して載せられたもので、次の通りである。[6]

「（佐野は）今より（筆者注：一九〇五年）十年前上京して義塾に入り幼稚舎より順を追って大学部に進み、本年遂に其の学業を了へたるなり。是より先き八年前氏（筆者注：佐野）は塾内の柔道部に加入して嘉納流の教師山下義韶、内田良平両氏の教導を受け過般既に初段に昇り今や二段に進まんとする。[7]」

この記事からもわかるように、佐野は慶應義塾で、専門勉強以外に、柔道習得にも興味を持っていた。タゴールは日本語及び柔道の教師を求めていたため、佐野の推薦者は、彼の柔道能力を評価し、タゴールのとこ

ろへ派遣させる意味を見出し、彼を推薦することを判断したと考えられる。

さらに、佐野の知人で、「印度及印度人」の「序」を書いた石田新太郎は、佐野の大学における専門に関して、「佐野君は明治三八年我慶應義塾大学政治科の出身なり」[8]という情報を残している。

また、石田新太郎は佐野のインド訪問について、「卒業後間もなく約に基き詩人タゴール氏の招聘に応じて彼の地に渡りその家庭教師たり。（中略）大正三年（一九一四）四月帰朝せられたり」[9]と書いている。つまり、佐野は、二三歳という若さでインドに訪れ、帰国するまで、九年間インドで日本語や日本文化の導入及び普及に努めたことになる。

タゴールに招かれて、佐野と一緒にタゴールのところに訪れた、勝田蕉琴は、佐野に関して、「明治三八年の秋だったと覚えていますが、（岡倉）天心先生のお世話で、佐野甚之助さんと私の二人が、タゴール家に招かれて行きました。佐野さんは柔道の関係で呼ばれたので、始めしばらくラビンドロナート（タゴール）さんの家にいましたが、後にサンチニケータン（筆者注：シャンティニケトン）で柔道を教えました」[10]と記述している。佐野は、タゴールに紹介されてインドへ来るのだが、「後ち、タゴール氏の紹介にてベンガール州の土候国クーチ、ベハール（筆者注：ビハール州）王家の家庭教師となり、後更に南印の一大土人州マイソール王国政府の教官に聘せられ同国の軍隊及警察の顧問となる」[11]という報告もある。

『慶應義塾百五十年史資料集』によると、佐野は、明治三八年（一九〇五）に、「印度カルカッタ市タゴール家」[12]、そして、大正元年（一九一二）に「c/o The Private Secretary, Office Palace, Mysore, India」[13]に滞在していた。

また、佐野は、帰国後、一旦故郷へ戻り、「大正四年（一九一四）」より、母校の慶應義塾の「大学部の予科

に」教員として任命され、「日本作文」の授業を担当した。[14] さらに、同資料によると、佐野はこの時期に、「東京市京橋区銀座二ノ十三」[15]に住宅を持ち慶應義塾に通勤していたことがわかる。

佐野は、シャンティニケトンでの任期が終わって帰国してからもタゴールと接触しており、日本においてもタゴールやインドに関わる事業に参加していた。これについて次のような報告がある。

例えば、佐野の長女である、北原友季子は、佐野とタゴールの友情について、「私が武蔵野女子学院の二年の春（筆者注：一九一六年）、タゴールさんが来日され、私は父と帝国ホテルへ参りました。広いロビーには、いろいろな人が三々五々集まって談笑しておりました。しばらくそこで待っていますと父が戻ってきて、そして私は父に促され、後について行きました。とある室のドアを押し、中に入りますと、アルバムにあるような立派な白髪の老人が、窓を背にしてふかふかとソファーに座っていました。父は私を紹介して、『これは私の娘で、十四歳です。』英語を習いたての私にはそれ以上はわかりませんでした。タゴールさんはニコニコして座ったまま手を差し出され握手をしてくださいました」[16]と、親密な様子を書き残している。

佐野は、一九三八年に亡くなっている。佐野はタゴールより二一歳年下だが、タゴールが亡くなる三年前に亡くなったのである。

一―三　佐野によって書かれた文献

佐野は帰国後、タゴールやインドに関する様々な文献[17]を公刊しているのだが、ここで、本研究に直接関係のある、佐野によって書かれた二つの文献を紹介する。

一番目は、『名士のタゴール観』という本に出ている、佐野の「タゴール先生と自分」と題する論文である。

この本は、一九一五年に出版された、様々な論文からなる編集版であり、佐野の論文は二六六頁から二八〇頁の一五ページにわたっている。この論文で佐野はシャンティニケトン学園の子供たちに日本語を教えた自分の経験について詳細に述べている。ちなみに、佐野のこの論文は、当時のインドにおける日本語教育を論じるものではない。タゴール家、タゴールが作ったシャンティニケトン学園などを実際に日本人に紹介している論文である。佐野はこのシャンティニケトン学園で日本語も教えたため、そのときの様子にも言及しているに過ぎない。ただ、佐野のこの日本語教育に関する記載は当時の日本人に対して、概略的情報を提供するだけであったかもしれないが、現在では、インドにおける日本語教育の歴史を知るために重要な研究資料になっている点は強調しておきたい。

二番目は、一九一七年に発行された、『印度及印度人』という単行本である。佐野は、インドでの日本語教育のことを日本人に知らせるために書いた「タゴール先生と自分」のように、この本をインドという国及びその社会状況を日本に紹介するために書いたのである。石田新太郎は、佐野はこの本を「在印度中見聞せし所を基礎として諸種の書籍を渉猟し特に現時彼地にて発行せらるる新聞雑誌を参考して社会一般の事情を記述せられたるもの」[18]と述べている。この本に、インドにおける日本語教育についての言及はないのであるが、ここまで数カ所で引用してきた石田新太郎の序文はこの本に掲載されているものである。

一―四　シャンティニケトン学園

シャンティニケトン学園は、タゴールによって設立された学校である。上述のように、タゴールは詩人であった。また、彼はインドの思想家及び教育者でもあった。この点で、彼は日本の革新的思想家である福沢諭

吉（一八三五～一九〇一）と並び評される。彼は、日本での福沢諭吉や岡倉天心と同様に、インド人の教育のために、その出身地で一つの教育機関を設立し、それをシャンティニケトン学園と名付けた。佐野はこの学園を逐語的に「平和郷」[19]と訳している。シャンティニケトンの「シャンティ」は「平和」の意味を用い、「ニケトン」は「家、あるいは、故郷」と言う。同学園は、現在日本のインド学者の間では一般に「タゴール学園」[20]として知られている。また、慶應義塾のように、このシャンティニケトン学園も、一九二一年にビシュワバラティ大学として拡大され、中に「Nippon Bhawan（日本語学科）」という学科もあり、日本語教育にも力を注ぎ、現在もシャンティニケトン学園を継承している。[21]

シャンティニケトン学園は、インドのコルカタ市（旧カルカッタ市）の近くに位置している。コルカタ市は、一九一二年まで英領インド政府の首都であったため、外国人の集まりやすい地域であった。そのためこのシャンティニケトン学園も注目を集め、結果的に日本語教育も含めて学園の教育は盛んになった。同学園はもともと「五人の学生をもって、一九〇一年十二月に発足」[22]した。佐野は、この学園の発足当時の様子について次のように述べている。

「私は日本出発前当時（一九〇五年）は、このシャンティニケタン（筆者注：シャンティニケトン）塾は、一個の徐々たるコレッヂにして、学生数百名を有するならんと想像していたのですが、行って見ると八九歳の幼年より十四五年の少年生徒わずかに三十名許り居るに過ぎませんでした。[23]」

一―五　シャンティニケトン学園の言語観

シャンティニケトン学園は日本語だけの学校ではない。タゴールはこれをアジアの文化を広げるために創立

していた。タゴールは岡倉天心と同様に、アジアの文化の本質を信じていた。彼は、アジアの文化が決してヨーロッパの文化より劣ったものではなく、ヨーロッパがその政治且つ軍事力の基で世界の国々を抑圧し、その文化を圧迫していると考えており、アジアの文化をヨーロッパの文化と同等の位置に持ちあげるために、アジア文化の復興を強調した。そのために、アジアの学者の交流の場所を作らなければならないと強く感じ、シャンティニケトンもその理由から創立されたのである。

タゴールはまた、日本、中国、そしてインドがアジアの文化の柱であると信じていた。そこで彼は、世界の学者をインドの文化を学習するように招く一方で、インド人に日本や中国の文化を紹介するように努めた。ここで、強調せぬはならないのは、日本や中国の学者だけに限らず、アジアについて研究する世界のさまざまな学者を招聘したことである。日本の学者をはじめ、世界の多くの学者がシャンティニケトンへ招かれた。表2は、シャンティニケトンが創立してから一九〇六年[24]までシャンティニケトンへ来た日本の学者のリストである。

表2：シャンティニケトン学園を訪ねた日本人学者

学者名	訪ねた年	訪ねた理由
堀至徳	一九〇二年	サンスクリット語学習
横山大観	一九〇三年	不明
佐野甚乃助	一九〇五年	柔道と日本語教授
河口慧海	一九〇六年	梵語学習
勝田蕉琴	一九〇六年	美術教授

（吾妻、一九八〇：二八―二九より表の形に筆者作成）

表2からもわかるように、シャンティニケトン学園は語学だけでなく、文化の研究機関としての側面がむしろ注目されていた。ただし、それにもかかわらず、両国の言語学習に関する考えもずいぶん強かった。タゴールや岡倉はかなり前から文化を理解するために、インドと日本は、互いにそれぞれの国

の言語を学習する必要があると考えていた。そのため、シャンティニケトンの創立後すぐ、岡倉は自分の弟子を、インドのさまざまな言語を学習するために送った。そして、一方のタゴールも、日本の文化を理解するために日本語の必要性を感じていた。そのために最初から日本に対して日本語講師の派遣を要請した。佐野は、その最初の日本語教師である。

一―六　佐野の推薦者

上述のように、佐野はタゴールの招聘で、シャンティニケトン学園へ日本語と柔道を教えに行った。ただし、佐野について事前に十分な知識を持っていなかったタゴールが、佐野を直接招いたとは思えない。そのため、前述のようにタゴールは人物を特定せず、ただ柔道及び日本語の教師を求めた。そこで、タゴールは日本のだれに依頼したか、そして、だれが佐野をシャンティニケトンに行くように推薦したかという問題が浮かんでくる。その答えはこれまで明らかにされていない。

しかし、これまで発掘された資料を分析すると、可能性として、佐野を推薦した三名がいると考えられる。その一人は岡倉天心である。前記のように、佐野と一緒にシャンティニケトンへ行った勝田蕉琴（表2を参照）が、「（岡倉）天心先生のお世話で、佐野甚之助さんと私の二人が、タゴール家に招かれていきました」[25]と述べている。このことを考えると岡倉はその推薦者の一人であると考えられる。

二番目の推薦者として考えられるのは河口慧海（一八六六～一九四五）である。河口の推薦に関して『時事新報』には、「日本語をその子弟に授けんとするものにしてさる五月頃（筆者注：一九〇四年五月）河口（慧海）氏まで適当の教師を周旋しくれとの依頼ありしかば氏は実弟河口平揚氏に其旨を通ひ平揚氏は爾来諸方に

交渉の上柔道の方は佐野氏（省略）を選定したる次第なる」[26]という詳細な情報がある。タゴールのこの依頼は、いつ、どのように行われたか明らかではないが、一九〇三年の河口のインド訪問、さらにタゴールとの対面について、河口は「一九〇三年一月にカルカッタ着」[27]、そして、再び「同年一〇月にカルカッタ着。カルカッタ大学の寄宿舎に入り、梵語研究を始める。タゴール邸に寄宿」[28]と記しているように、河口が佐野のことを知り合う十分前にタゴールと知り合っていたことが明白である。ちなみに、表2にも述べたように、河口は、佐野がシャンティニケトンに滞在している間、一九〇六年に「梵語を学ぶ（一か月）」[29]ためにシャンティニケトンへ行ったという情報がある。

佐野の推薦者として三番目に出てくる名前は福沢諭吉である。しかし、タゴールは一九〇一年一二月にシャンティニケトンを設立した。そして、福沢はその一〇ヶ月前、つまり、一九〇一年二月に亡くなっている[30]。このことから考えると、福沢は佐野を直接推薦したとは言いがたい。ただし、福沢と佐野の間にあった親しい関係は佐野の進路の助けとなったことは予想される。福沢と佐野の関係に関して次のような情報がある。佐野は、学生時代に「福沢家の一室を借りて通学して」[31]おり、福沢が提示した様々な学説や理論など

佐野の家族の写真

（出典：慶應義塾福沢研究センター）

の普及に大きく関って[32]、福沢と慶應義塾のあり方や学生のあり方について議論する学生グループのメンバーであった。

さらに、福沢の葬儀の時に「樒係」として名前が見えるように、若い学生でありながら福沢が親交が深かった[33]。

佐野の推薦者は、佐野と福沢の間のこのような親しい関係および、彼の柔道能力を考慮し、彼を推薦したのではないかと思われる。言い換えれば、福沢は佐野の直接的な推薦者でなくても、間接的な推薦者であると言えよう。

二　佐野及びインドの日本語の授業

二―一　佐野がインドに来た理由

佐野は、シャンティニケトンへ行く理由を次のように語っている。

「一昨年（一九一三年）ロビ先生（タゴールのこと）が名誉あるノーベル賞金を得て、世界の大詩人たるを認められたるが為に、今迄ボンヤリして居った人々も、彼に驚きの眼を張りて彼が詩歌を見、またその思想の根底を成せる哲学とか、宗教とかを研究せんとするもの続出するに至った如く。丁度明治三十七八年の日露戦役は、日本を世界に紹介したので、印度の人士も、西欧の一大強国学退したる東洋の一小国をば、非常の尊敬と愛慕の念を以て迎ふるに至り、（中略）ロビ先生も亦大の日本憧憬者で（省略）あって、その為に私は印度

に招かれた」[34]と佐野は指摘している。

二―二　シャンティニケトンの日本語の授業の構成

佐野はシャンティニケトンのその日本語の授業について次のように述べている。

「（省略）日本語のクラスには、ロビ先生（筆者注：タゴールのこと）が特に優秀なる生徒八名を選抜して呉れました。十二三歳の少年達でありました。[35]」

前述のように、佐野がシャンティニケトン学園に到着する際、学園に三〇名余りの学習者がいた。しかし、その中で八名しか日本語の学習を経験することになった者はいなかった。このことは、学園の全ての学習者が日本語を学習していた訳ではないことを示している。「特に、優秀なる生徒」と書いてあるように、言語学習に優れた学習者だけが日本語教育を受けることを認められた。

佐野は、これらの学習者の名前を出していないし、彼らが日本語を学習した結果、どれぐらいの日本語能力を持つようになったかということについても触れていない。さらに、これらの学習者が学習した日本語を将来どのように使ったのかということに関する情報もない。これらの学習者達は一二・一三歳頃日本語を習いはじめて、佐野がこの論文を書く時には、もう二八歳になっていた。おそらく佐野は、シャンティニケトンを出た学生についての情報を得ることができなかったであろう。

二―三　日本語の授業の流れ

佐野はまた、日本語をどのように教えていたかについての情報を次のように残している。

「私は初め羅馬字を以て日本語を教授せんとしましたが、ロビ先生の要求で、片仮名を以て教ゆることにしました。先づイロハの発音を教へてみたるに多くは『ツ』と『ス』を最初二三度は『チュ』と『シュ』の如く発音したけれども、これは直ちに匡正することが出来ました。これはベンガル人の癖でスクールをシュクル、サンスクリットをションシュクリットと発音します。また、英語で『a』を以て表はして居るインド語を彼等の言ふのを聞けば『オ』と発音するように思われます。例えば、詩人の名のラビンドラをロビンドラと云ふて居ります。[36]」

シャンティニケトン学園で日本語を教える前に、佐野が教授法についての訓練を受けていたかどうかは明確ではないが、上記の文を見ると、教えながら日本語の教授法について同時に模索していたと言えるのではないか。さらに、以下の文を見ると、彼がインドの言語と日本語の言語構造や文法を比較しながらに教えるような道を探し始めていたと言える。

「ベンガル語はその語源を世界の言語中最も難しいサンスクリットに発するが故ベンガルの少年共には、日本語の音の如きは頗る簡単なるもので、且つその文法は両語相似たるものがあるので、容易に習得することが出来、ロビ先生も大に喜んで居られました。[37]」

二―四　佐野の日本語に対する感情

佐野のインド訪問について、学者たちは、彼が「柔道及び日本語」を教えるために、タゴールに招かれたと指摘している。ただし、ここで注目すべきは、佐野が自分の論文で「柔道及び日本語」の順序を変えて、「ロビンドラ、ナート、タゴール先生に招聘せられて、ベンガル州の片田舎に設立せる先生の私塾に、日本語と柔

道の教師として赴任した[38]」、「私は前にも言ふた通り、日本語と柔道の教師として居つたのです[39]」というふうに二回も記述しており、「日本語」を「柔道」より優先しているのである。このことは、佐野が外国人に柔道よりも母語の日本語を教えることに満足していたことを示している。

二―五　英領政府の圧力

シャンティニケトン滞在中、佐野は植民地の問題も経験し、それがタゴールの学園の展開に与えた影響のことも感じていたようである。彼は、このことについて次のように報告している。

シャンティニケトン学園には「少年生徒僅かに三十名許りいるに過ぎませんでした。ロビ先生は之に満足しませんでしたが、一方には資金の豊富ならざるあり、他方には官僚の迫害ありて規模を拡張することはできなかったです[40]。」

ただし、このことは「三年前（筆者注：一九一二）先生が渡英した時、これまで官吏にしてその子弟を『平和卿』の塾に入門せしむることを禁じておりましたところのベンガル州政府の禁令は撤廃さるるに至」ったとされている[41]。また、佐野によると、タゴールがノーベル賞をもらってから、この問題は緩和したようである。

さいごに

世界の日本語教育史を見ると、二〇世紀の初めに、日本語教育が世界の様々なところに普及していたことが分かる。これは三つの方法で広がっている。

まずは、日本政府の植民地支配や占領政策によって、台湾、韓国、そして、戦時下の東南アジア等で導入された日本語教育である。二番目に、戦略的な理由でその軍隊に日本語を教えようとする政策である。オーストラリアのような国はこれに当たる。最後に、ドイツのように、日本語を学習することによって、日本を最もよく知ることができるという考え方である。いずれの場合も日本語教育が政府のイニシアチブのもとで導入されている。

インドでの日本語教育はこの三つの種類のどれにも当てはまらない。一方、インドの日本語教育はある人の個人的な努力によって始まり、政府の支援どころか、それに反対する圧力を受けながら展開して行く。そのために、この時期の日本語教育はインド全国に広がることがなく、シャンティニケトン、あるいは少し広げても、コルカタ市に限定されてしまったのである。このことは反面、シャンティニケトン学園の日本語教育は、政府の支援がなくても導入されたという積極的なことも示している。

シャンティニケトン学園の日本語教育を語る時、もう一つ指摘できることがある。それは、中等教育での日本語教育についてである。世界の日本語教育の歴史で、オーストラリアは一九一八年にシドニーのフォート・ストリート・ハイスクールとノース・シドニー・ハイスクール[42]という二つの学校ではじめて日本語教育を導入したと、しばしば指摘されている。この理由から、中等教育の分野で日本語教育を始めたのはオーストラリアであるという主張が強い。

これに対して、今まで論じてきた通り、シャンティニケトン学園では一九〇五年という早い時期に日本語教育が行われていたのである。しかし、シャンティニケトン学園は、この時期にまだ教育機関として認められていなかったという事情があるので、中等教育における日本語学習がインドで始めて導入されたとは言い難い。

しかしながら、日本語教育というものは、子供たちに日本語を身につけさせるものであると考えるならば、インドの子供達は、オーストラリアよりずいぶん前に日本語と接触したということができる。

上述のように、インドでは日本語教育がタゴールによって導入されたのであるが、タゴールの当初考えていた構想通りには進まなかった。タゴールが様々な問題に立ち向かい、日本語教育を導入したことは現実である。しかし、これは佐野甚之助がタゴールの招聘に応えてシャンティニケトン学園へ来なかったら可能にならなかったし、佐野が日本語を教える際の経験を書き記さなかったら、次世代のわれわれはこれらの歴史的な事実を知ることはなかったのであろう。

注

（1） Hay, 1970、我妻、一九八一、山崎・長崎、一九九三

（2） Hay：42

（3） 我妻：二八―二九

（4） 我妻：三二

（5） 『時事新報』は、慶應義塾大学を設立した、福沢諭吉（一八三五～一九〇一）によって一八八二年に創刊された新聞で、国内外の諸分野に渡る記事を掲載する一般的な新聞であるが慶應義塾関係のニュースについては特に詳しく掲載される。

（6） 注：本論に引用する文献の旧字体は、新字体に改めた。

（7） 時事新報、明治三八年（一九〇五）一〇月一日。

（8） 佐野、一九一七：ii

（9）佐野、一九一七：ii
（10）勝田、一九五九：六
（11）佐野、一九一七：ii
（12）慶應百五十年資料集、第二巻：一一八
（13）慶應百五十年資料集、第二巻：一七五
（14）慶應百五十年資料集、第二巻：五五二
（15）同上：二一七
（16）北原、一九六〇：四
（17）佐野の著書の中には、タゴールの小説「ゴラ（一九二四）」及び・ボンキム・チョンドロ・チャットラヂイの「二つの指輪（一九二五）」の和訳の他に、「ガンディと其の思想（一九二七）」というものがある。
（18）佐野、一九一七：二―三
（19）佐野、一九一五：二七二
（20）我妻：二八
（21）詳細は http://www.visvabharati.ac.in/ を参照。アクセス二〇一七年一〇月二二日
（22）我妻：二八
（23）佐野、一九一五：二七四
（24）この後も多くの日本人学者がシャンティニケトンへ訪ねている。我妻（一九八一：三一）はこのような交流に関して「現在の日本の状態から考えれば、これらのことは何ら特筆べきではないかもしれないが、第二次世界大戦前、一般に海外留学者、文化交流者の少なかった時代に（省略）タゴールの学園と日本の間に前述の交流が行われたことは、タゴール自身の意志と精神によるものであった。」と指摘している。

(25) 勝田、一九五九：六
(26) 時事新報、一九〇五：八
(27) 河口、二〇一五：三〇四
(28) 同上：三〇六
(29) 同上：三〇六
(30) 慶應義塾百年史、一九六〇：五一二
(31) 高橋、一九七四：三三〇
(32) 詳細は、高橋、一九七四：一四二を参照
(33) 慶應義塾百年史、一九六〇：五一四
(34) 佐野、一九一五：二六六—二六七
(35) 佐野、一九一五：二七五
(36) 佐野、一九一五：二七七
(37) 佐野、一九一五：二七六—二七七
(38) 佐野、一九一五：二六六
(39) 佐野、一九一五：二七五
(40) 佐野、一九一五：二七四
(41) 同上
(42) 島津、二〇〇四：五一

参考文献

1. 我妻和男『人類の知的遺産61タゴール』、講談社、一九八一年
2. 川口慧海『川口慧海著作選集』10、慧文社、二〇一五年
3. 北原由季子「タゴールさんの手」『さちや』第九号、一九六〇年
4. 慶應義塾編『慶應義塾入社帳』第4巻、慶應通信、一九八六年
5. 慶應義塾編『慶應義塾百年史』、慶應通信、一九六〇年
6. 慶應義塾150年史資料集編纂委員会編『慶應義塾百五十年史資料集』第1巻、二〇一二年
7. 佐野甚乃助「タゴール先生と自分」、清澤巌（編集）『名士のタゴール観』、成南社出版、一九一五年、二六六―二八〇頁
8. 佐野甚乃助『印度及び印度人』、丁未出版社、一九一七年
9. 『時事新報』明治三八年（一九〇五）一〇月一日付、「招聘教師の印度渡航」
10. 高橋誠一郎『随筆　慶應義塾』、慶應通信、一九七四年
11. 島津拓『オーストラリアの日本語教育と日本の対オーストラリア日本語普及――その「政策」の戦間期における動向』ひつじ書房、二〇〇四年
12. パンダ　ナビン　クマール『インドの中等教育における外国語政策――日本語教育政策の展開を事例として』、博士論文、政策研究大学院大学、二〇一二年
13. 山崎俊夫・高崎満（編）『日本とインド交流の歴史』、三省堂選書、一九九三年
14. Hay, S.N.（1970）*Asian ideas of east and west — Tagore and his critiques in Japan, China and India*（『東と西におけるアジア思想――タゴールと日本、中国、インドにおけるその批評論』）, Harvard University Press

謝辞：本研究を行うにあたって様々な方々と機関にお世話になりました。野山広先生（国立国語研究所）、簗島史恵先生（国際交流基金国際日本語センター）、嶋津拓先生（埼玉大学）、都倉武之先生（慶應義塾大学）の他に、国際交流基金日本語センター図書館、慶應義塾図書館、国立国会図書館に心から感謝を申し上げます。